

# 人種・民族構成からみたアメリカ大都市圏の動向

樋口忠成

## Changing Racial and Ethnic Composition of Metropolitan America

HIGUCHI Tadashige

### I 人種・民族とアメリカ都市

多人種多民族から構成されるアメリカ合衆国において、人種および民族の問題は、経済・社会にかかわるあらゆる問題に（たとえそれが中心的なテーマでなくとも）何らかの関連をもって語られる。特に経済社会の機能が集中すると同時に多人種多民族が共存する都市においてはそうである。1960年代は公民権運動や人種暴動など人種問題が社会の中心的なテーマの一つであったので、社会科学のさまざまな分野で人種が語られてきた。都市に関していえば、特に北東部や中西部の都市に南部から多数のアフリカ系人口が流入し、都市におけるセグリゲーションや白人の郊外逃避が研究の対象となった。人種によって分断された都市、アフリカ系のゲットー、人種間の経済雇用の格差などが研究されてきた。この場合分断された都市は、白人と黒人に分断されたのであり、ゲットーはブラック・デトロイト、ブラック・シカゴのようにアフリカ系の集住する居住地を意味していた。

このようなアメリカの人種関係は1970年代以降大きく変化する。一つは、1960年代の運動の成果によって公民権法が成立し、南部からも制度的な差別が消え、また積極的差別是正措置としてのアファーマティブ・アクションが一定の成果をあげはじめたことである。アフリカ系と白人の経済的な格差が少なくとも長期的には（徐々にではあったが）縮小しはじめ、またアフリカ系のミドルクラス化が限定的にも進行した。アファーマティブ・アクションは、人種（にもとづく差別）に敏感な社会状況を作り出す上で大きな成果があったと思われる。二つ目は、移民法の改正である。それまでの移民はその出身国によって異

なる許可数が割り振られる一方でアジアからの移民は実質上禁止されていた。1965年移民法は、移民の国別割り当てを廃止し、地域による区別をも廃止した。これによって、1970年代以降特にアジアから移民が急増したのである。3つ目の大きな変化は、メキシコをはじめとしてアメリカ合衆国の南のラテンアメリカ諸国から大量の移民が流入しはじめたことである。これら3つの人種関係や人種構成にかかわる状況は、1970年代以降加速しながら継続した。

この結果、アメリカの人種にかかわる状況は大きく変化した。白人とアフリカ系の関係を軸とした人種関係が、対立から問題解決志向へと転換すると同時に人種構成の多様化が急速に進んだのである。いわゆる多文化社会への移行である。多文化社会の背景にあるアジア系やラティーノの急増は、特にそうした人口が集中する大都市の人種構成を大きく変え、より複雑な人種関係をもたらした。かつてのマジョリティとしての白人とマイノリティとしてのアフリカ系という単純な図式の人種関係から、多岐にわたる人種関係が発生してその組み合わせが複雑化し、マジョリティとマイノリティという関係だけでなく幾種類ものマイノリティ同士の関係が存在するようになった。人種関係が危機的状況になったときしばしば人種暴動という形で爆発するが、同じロサンゼルスで発生した人種暴動でも1965年のワッツ暴動と1992年のサウスセントラル地区の暴動との違いが人種関係の転換を象徴的に表している。前者の暴動は白人マジョリティに対するアフリカ系の不満の発露であったのに対し、後者の暴動は白人、アフリカ系、ラティーノ、韓国系などを巻き込んで、対立がはるかに複雑な様相を呈したのである。

また近年アメリカ都市は大都市圏の急膨張によって広大な郊外が形成され、スプロール(対策)が重要なテーマになっている。こうした郊外化の流れの中で、郊外におけるマイノリティの排除が問題視される一方で、マイノリティ自体の郊外化も徐々に進行し、大都市圏における人種によるセグリゲーションの緩和も進んでいる。しかしマイノリティ人口の多様化が進むにつれマイノリティ間の格差も同時にみられるようになったのである。

このように都市をめぐって人種にかかわる問題はより複雑化する傾向にある。そこで本稿はこうした複雑化する人種の分布を大都市圏単位で把握することを目的とする。このため次節以下でまず近年のアメリカの人種構成の変化を特に1990年と2000年の比較によってデータから考察したい。

報告者はかつて1990年センサスをデータとして、アメリカの人種別人口分布を考察し、大都市圏に関しては都市化地区を地域単位として人種構成の分析を行った。この報告は、先その分析に2000年のデータを適用するよって1990年代の変化を含めて最新の大都市圏の人種構成の特徴を考察したい。分析に用いるデータはおもに2000年センサスの大都市圏

(MSA / CMSA) データである。次章でアメリカ全体、第Ⅲ章で大都市圏全体の人種構成を概観し、第Ⅳ章では人種構成による大都市圏の類型化を行うこととする。

## Ⅱ 変化するアメリカの人種構成

### 1. 最大マイノリティになったラティーノ

1980年のアフリカ系人口は2614万で全人口の11.5%を占めていた。これに対してラティーノ人口は6.4%の1461万で、その差は約1150万あった。1990年になると(非ラティーノの)アフリカ系人口は2930万に増加し、全人口の11.8%に増えた。一方ラティーノ人口は全人口の9.0%にあたる2237万に急増した。アフリカ系とラティーノの差は約700万に縮まった。1980年代にラティーノ人口は2倍以上に増加したことになる。ラティーノ人口は1990年代になってもひき続き増加してアフリカ系人口を急追した。1999年に出版されたアメリカ合衆国統計要覧によると、1998年の推計人口では、アフリカ系3272万に対し、ラティーノ3025万と、ラティーノが3000万を超えてアフリカ系に肉薄している。これはアフリカ系人口とラティーノ人口が近い将来に逆転することを意味していた。同じ統計要覧の将来人口予測では、中位推計で2005年にこの逆転現象が起こると予測されていた。

そして2000年センサスの結果が集計されて公表されると、人口の逆転はこの予測よりも5年早く、すでに2000年のセンサス調査時に達成されていたことが判明した。このことはアメリカ史において非常に象徴的な意味を持つ。アメリカの独立以来、奴隷制度や南北戦争、公民権運動と、常にマイノリティの歴史において中心に位置しつづけたアフリカ系が、21世紀を迎えて、少なくとも人口規模においてラティーノに最大マイノリティの座を明け渡したのである。こうしたラティーノ人口の急成長は「アメリカのラテン化」とも呼ばれる現象としてアメリカ社会に言語、文化、政治、法律上の新たなコンフリクトや問題を生起させている。このことに象徴されるように1990年代は人口構成上の大きな転換点になったといえよう。

### 2. センサスにおける人種分類

アメリカの人種構成の変化を具体的に取り上げる前にアメリカのセンサスにおける人種分類についてふれておきたい。なぜならアメリカの人種統計のデータは取り扱いが難しいのである。もっとも難しいのはヒスパニックもしくはラティーノに関する取り扱いである。なおヒスパニックとラティーノは同義語だが、近年の研究の一般的使用例にそって本稿でもラティーノを用いる。なお本稿で黒人ではなくアフリカ系もしくはアフリカ系アメリカ

人を用いるのも同じ理由である。

さてラティーノは、センサスの集計項目ではHispanic or Latino Originという名称で集計されており、これは人種分類ではなく、別立ての質問および集計項目になっている。したがってラティーノにも非ラティーノと同様、白人、アフリカ系などの人種分類がある。現実にはラティーノは「白人」および「その他の人種」に属する人口が多いけれども「黒人もしくはアフリカ系」に分類される人口もいるし、「アジア系」あるいは「アメリカインディアン」の場合もある。またこれとは逆に「白人」や「黒人もしくはアフリカ系」と分類されるそれぞれの人種カテゴリーにはラティーノも非ラティーノも含まれていることになる。しかしアメリカ社会ではラテンアメリカ出身のカトリックおよびスペイン語という共通の宗教、言語を背景にもつ人びととその子孫を総称してヒスパニックもしくはラティーノと総称しており、個々のラティーノが属している人種集団よりもむしろ実在の人種民族集団として認識されている。したがってここでは人種分類より「ヒスパニックもしくはラティーノ」の分類を優先して項目として独立したものと考え、「白人」などの人種カテゴリーは非ラティーノのみを指すこととした。したがってここではラティーノも一つの人種民族集団として、非ラティーノ白人や非ラティーノのアフリカ系などと同列に一つの集団として取り扱うわけである。

センサスの人種の取り扱いでもう一つ難しい問題は、そのカテゴリーや用語がセンサスごとに少しずつ変わってきており、単純な比較が難しいことである。用語の変更例としては、アフリカ系のカテゴリーが1970年のNegro（ただしセンサスの質問紙ではNegro or Blackで、1960年のNegroにBlackが新たに加わった）から1980年（1990年も同じ）のBlack（質問紙ではBlack or Negroと順序が入れ替わってNegroが残された）に変わり、さらに2000年センサスではBlack or African Americanに変更された。African Americanが付け加わったことは一般にそのように総称されることが多くなったからだが、Blackのように純粋に人種的な分類からAfrican Americanのようにどちらかという民族的分類に重点がおかれるようになったのも社会の変化であろう。ただしこうした呼称の変更は社会で一般に使用される呼称の変化に沿ったものでカテゴリー自体の変更ではない。

アフリカ系以外にも現在使用されているカテゴリー名はセンサスごとにかかなり変わってきている。その一例として2000年からEskimoの集計項目が消えAleutとともにAlaska Nativeと呼ばれるようになっていく。それより複雑なのは、ラティーノのカテゴリーである。ラティーノは前述したように現在最大のマイノリティとなったが、実はセンサスでの登場は1970年と非常に新しい。しかも1970年センサスではラティーノはもちろんのこと、ヒスパニックと言う用語すらまだ使われておらず、Population of Spanish Languageの呼

称が示すようにスペイン語を母語とする人口の集計であった。それも全数集計ではなく15%のサンプル集計で、したがって人種とのクロス集計も行われていなかった。1980年センサスで初めてラティーノの全数集計が実施され、その呼称にはじめてHispanic Originが使用されるようになった。そして2000年になるとHispanic or Latino Originに変わったのである。したがってラティーノ人口は1980年までしかさかのぼって比較できないのである。

人種カテゴリーに関して1990年から2000年のセンサスで変更されたものには呼称変化のほか大きく2つある。一つは1990年までは「アジア系および太平洋諸島系」(Asian and Pacific Islanderで通常APIと略される)の名称で一括されていた大分類のカテゴリーが「アジア系」(Asian)と「ハワイ先住民およびその他の太平洋諸島系」(Native Hawaiian and Other Pacific Islander)の2つに分離されてそれぞれ独立した大分類になったことと、もう一つは2000年に新たに「複合人種Race in Combination」(カテゴリー名としてはPopulation of Two or More Races)が設けられたことである。新設された複合人種カテゴリーには、さらに含まれる単一人種の組み合わせによってより細分化されている(例えば白人とアフリカ系の複合人種や白人とアジア系の複合人種などさまざまな組み合わせがある)。人種間結婚が増えて単一人種に分類できない人口が増加したことが背景にあるのだろう。

このように人種統計の経年変化の取り扱いには困難があるが、はたして1990年代にアメリカの人種構成はどう変化したのだろうか。

### 3. 1990年代におけるアメリカの人種構成の変化

表1に1990年と2000年の人種別人口をかかげた。この表では2000年のカテゴリーにあわせて1990年のデータを整理した。

この10年間の大きな変化と言えるのは、人種的マジョリティである非ラティーノ白人の比率が大きく低下したことである。1990年に75%を超えていたその比率は2000年には69.1%と70%を下回った。このことは、逆にいえば人種的マイノリティ人口の比率が30%を超えたことを意味する。その中でももちろんラティーノ人口の急増が目を引く。前述したようにラティーノ人口は3500万を超えて非ラティーノ黒人人口の3400万を上回って最大のマイノリティになった。これがアメリカの人種関係史上の大きな転換点であることは20世紀後半だけみても、公民権運動、人種暴動、反レイシズムといった運動や現象の中心に常にアフリカ系がいたことから理解できる。

ラティーノの急成長はその増加数をみても裏付けられる。ラティーノ増加数は10年間に1300万を超えているが、これは人口規模では6倍にも相当する非ラティーノ白人の何と2

倍を上回る増加数なのである。ラティーノと並んで10年間に50%以上の増加率を示しているのがアジア系で、アジア系人口は1000万を超えた。「アメリカのラテン化」とともに「アメリカのアジア化」がいはれる所以である。

このように人種によって極端に人口増加率が異なる原因は何だろうか。

その一つが自然増加率の差異であると考えられる。さらにこの背景には人種によって年齢別人口構成が異なることと、出生率が異なることの2つがある。まず年齢構成であるが、年齢中央値を人種ごとに比較すると、非ラティーノ白人が38.6歳なのに対して、アジア系が32.5歳、アフリカ系が30.0歳と若くなり、ラティーノは25.8歳と非ラティーノ白人とは10歳以上も開きがある（データは2000年）。ちなみに65歳以上の人口比率も、非ラティーノ白人15.0%に対して、アフリカ系8.0%、アジア系7.7%で、ラティーノは4.9%となっている。このようにラティーノは年齢構成そのものが若い。

表1 アメリカ合衆国の人種別人口（1990年～2000年）

人 種		1990年		2000年		1990年～2000年の変化	
		人 口	比率	人 口	比率	増加数	増加率
すべての人種		248,709,873	100.0	281,421,906	100.0	32,712,033	13.2
非ラ ティ ーノ	白人	188,128,296	75.6	194,552,774	69.1	6,424,478	3.4
	黒人/アフリカ系	29,216,293	11.7	33,947,837	12.1	4,731,544	16.2
	先住アメリカ人	1,793,773	0.7	2,068,883	0.7	275,110	15.3
	アジア系	6,642,481	2.7	10,123,169	3.6	3,480,688	52.4
	ハワイ系/太平洋諸島系	325,878	0.1	353,509	0.1	27,631	8.5
	その他の人種	249,093	0.1	467,770	0.2	218,677	87.8
	複合人種	…	…	4,602,146	1.6	4,602,146	…
ラティーノ(ヒスパニック)		22,354,059	9.0	35,305,818	12.5	12,951,759	57.9

資料：各年センサスによる。

また人種による出生率の違いも顕著である。2002年の人種別出生率（人口1000人あたりの出生数）を比較すると、非ラティーノ白人の11.7に比べて、アフリカ系は16.1、ラティーノは22.6となっている。ラティーノの中でもメキシコ系は24.2と特に高い。2002年の出生力（15歳から44歳までの女性1000人に対する出生数）で比較しても、非ラティーノ白人57.4、アフリカ系67.4に対して、ラティーノは94.4と圧倒的に高い（メキシコ系のみをとりあげると102.8）。このためアフリカ系とラティーノは人口規模が同じでも、2002年の出生数はアフリカ系58万に対してラティーノは88万と30万も多くなっているのである。

#### 4. 移民の流入

人口増加率が人種によって異なるもう一つの原因は社会増加率の違いである。アメリカは「移民の国」といわれ、現実に1990年代の人口増加のほぼ半数が社会増加と考えられる。しかも1990年代は1820年に移民統計がとられて以来最大数の移民がアメリカに到着した10年だった。1980年代に734万だった移民の入国数はさらに176万人増えて1990年代には910万となった。10年間の移民数としてそれまで最高だったのは20世紀初頭の1900年代で880万を記録していたが、20世紀最後の1990年代はこれを上回る史上最高数を記録した。

移民はどこから来たのだろうか。表2は移民の出身地域を示している。1900年代はヨーロッパからの移民が92%と大多数を占めていたのとは対照的に、1990年代は南北アメリカが50%弱、アジアが30%強で、この2つの地域で総民数の80%を占めていた。なお南北アメリカからの移民の約半数はメキシコからの移民である。アメリカ大陸からの移民は大多数がラティーノに属するし、また移民の約30%を占めるアジア系とともに人口増加率が圧倒的に高いのもこうした移民の多さによっている。

移民の出身地を国別にもう少し詳細に見ておこう。表3は1990年代に10万以上の移民が記録された23の国を示したもので、225万と移民数の4分の1を占めるメキシコのほかに、南北アメリカから、ドミニカ共和国、ハイチ、キューバ、ジャマイカのカリブ海諸国、エルサルバドル、グアテマラの中央アメリカ地域、南アメリカのコロンビアとペルー、隣国カナダの9か国の名があがっている。アジアからはフィリピン、中国、ベトナム、インドの4か国からの移民が多く、それ以外に韓国、パキスタン、イラン、台湾の名前があがっている。ヨーロッパからの移民も実は1980年代に比べると80%近く増加しているのだが、これは東ヨーロッパの社会主義政権およびソビエト連邦の崩壊に伴う流出と関連している。表3をみてもウクライナ、ロシアの旧ソ連とポーランドの名がみられる。

これらの移民統計に計上される移民のほかに、実はかなり多くの非合法移民がアメリカ国内に存在すると考えられている。アメリカ移民統計年鑑によれば2000年にアメリカに在住する非合法移民の数を約700万と推計しており、そのうち約70%に当たる480万をメキシコ出身と見ている。メキシコに次いでエルサルバドル、グアテマラ、コロンビア、ホンジュラスが多く、したがってこうした非合法移民の大部分はラティーノに属する人々である。

さて、これらの移民はアメリカのどこに向かうのだろうか。2000年には年間約85万の移民が受け入れられた。このうち大都市圏に向かったのが91.4%であった。また受入数上位50の大都市圏で移民総数の74.6%を受け入れていた（ただし移民統計ではPMSA単位で集計されているので50の大都市圏といってもCMSA単位では大都市圏の数はもっと少なくなる）。ニューヨーク、ロサンゼルス、シカゴ、マイアミなど受入数で上位10の大都市圏

表2 出生地域別に見たアメリカへの移民数  
(1991~2000年)

地 域	移民数	パーセント
世界	9,095,417	100.0
ヨーロッパ	1,359,737	14.9
アジア	2,795,672	30.7
南北アメリカ	4,486,806	49.3
カナダ	191,987	2.1
中央アメリカ	2,776,336	30.5
カリブ海諸国	978,787	10.8
南アメリカ	539,656	5.9
その他	40	0.0
アフリカ	354,939	3.9
オセアニア	55,845	0.6

Source: Office of Immigration Statistics, 2002 *Yearbook of Immigration Statistics*

表3 出生国別に見たアメリカへの移民数

(1991~2000年) 移民数10万以上の国

順位	国	移民数	パーセント
	世界計	9,095,417	100.0
1	メキシコ	2,251,364	24.8
2	フィリピン	505,553	5.6
3	中国	424,573	4.7
4	ベトナム	421,128	4.6
5	インド	383,304	4.2
6	ドミニカ共和国	340,939	3.7
7	エルサルバドル	217,394	2.4
8	ハイチ	181,765	2.0
9	キューバ	180,861	2.0
10	ジャマイカ	173,539	1.9
11	韓国	171,323	1.9
12	ポーランド	169,612	1.9
13	ウクライナ	141,297	1.6
14	カナダ	137,563	1.5
15	イギリス	135,837	1.5
16	コロンビア	130,994	1.4
17	ロシア	128,031	1.4
18	パキスタン	124,579	1.4
19	イラン	112,597	1.2
20	台湾	106,353	1.2
21	ペルー	105,724	1.2
22	ソビエト連邦	103,923	1.1
23	グアテマラ	103,105	1.1

Source: Office of Immigration Statistics, 2002 *Yearbook of Immigration Statistics*

で移民総数の41.6%であった。このように人口分布の比率に比べると移民の目的地の比率として大都市圏、とりわけ大規模な大都市圏の比重は非常に高い。

大規模な大都市圏に集中する移民だが、移民の出身国によって目的地となる大都市圏はおおいに異なっている。カナダやイギリスからの移民のように人種的には白人マジョリティが大部分と思われる国からの移民は特定の大都市圏に集中することはないようだが、移民の大部分が（アメリカに到着すれば）人種的マイノリティに入る国からの移民は、指向する大都市圏が少数に限定される傾向があるようだ（東ヨーロッパからの移民のように人種的にはヨーロッパ系白人に属する国からの移民も同様な傾向がみられる）。2000年の移民統計を分析すると、メキシコ、エルサルバドル、グアテマラの中央アメリカの国からの移民はロサンゼルス指向が多いし、フィリピン、ベトナム、韓国、台湾の東南アジア、東アジアの国の移民もそうである。一方ニューヨーク指向が高い移民の出身国として、ドミニカ共和国、ジャマイカ、ハイチのカリブ海諸国と、ロシア、ウクライナの旧ソ連、それ



にアジアからは中国、パキスタンなどがある。3番目に移民に人気があるのはマイアミだが、キューバからの移民が特にマイアミに集中するほか、コロンビア、ペルーの南アメリカの国もマイアミをおもな目的地としている。移民の目的地として4番目に多いシカゴは、インドおよびポーランドからの移民の最大の到達地となっている。いずれにしてもこれらの大都市圏は新たな移民を吸収し続けるので、人種的マイノリティの比率がますます上昇し、人種構成が一層多様化しているのである。

### Ⅲ 大都市圏における1990年代の人種構成の変化

#### 1. 大都市圏へのマイノリティの集中

ここではアメリカの大都市圏人口の人種構成を1990年と2000年を比較しながら見ていくことにする。ただし大都市圏の数も範囲も1990年と2000年で異なっているため単純な比較は難しい。表4は1990年と2000年でのすべての大都市圏の人種別人口を示したものである。全人口に対する大都市圏人口の比率は1990年では77.5%だったが、2000年になると80.3%と80%を超えた。人種別で見ると、人種的大多数であるヨーロッパ系白人の大都市圏への集中度は全人口を若干下回っている。白人は全国の75.6%（1990年）と69.1%（2000

表4 人種別人口の大都市圏への集中度（1990年と2000年）

人 種	アメリカ合衆国	大都市圏 (MSA/CMSA)	大都市圏 比率
			%
1990年			
すべての人種	248,709,873	192,725,741	77.5
白人	188,128,296	140,496,200	74.7
黒人	29,216,293	24,389,538	83.5
アメリカインディアン・エスキモー・アレウト族	1,793,773	867,911	48.4
アジア系および太平洋諸島系	6,968,359	6,543,970	93.9
その他の人種	249,093	223,304	89.6
ヒスパニック	22,354,059	20,204,818	90.4
2000年			%
すべての人種	281,421,906	225,981,679	80.3
白人	194,552,774	149,115,627	76.6
黒人・アフリカ系アメリカ人	33,947,837	29,227,557	86.1
アメリカインディアンおよびアラスカ先住民	2,068,883	1,065,488	51.5
アジア系	10,123,169	9,715,887	96.0
先住ハワイ人およびその他の太平洋諸島系	353,509	299,992	84.9
その他の人種	467,770	430,085	91.9
2つ以上の複合人種	4,602,146	3,953,101	85.9
ヒスパニック・ラティーノ	35,305,818	32,173,942	91.1

(注)1990年の大都市圏数は284, 2000年は276である。

資料：各年センサスによる。

年)を占めていたのに対し、大都市圏では72.9% (1990年)と66.0% (2000年)でその比率は全人口に比較して低い。一方非大都市圏での白人人口率は85.1% (1990年)と82.0% (2000年)で圧倒的マジョリティを維持している。一方人種的マイノリティをみれば、先住アメリカ人を除けば、いずれも全人口に比べて大都市圏への集中度が高いことがわかる。とりわけ高い率を持つのがアジア系で、人口の96.0%が大都市圏居住者である (2000年)。ラティーノも人口の91.1%が大都市圏に集中しており、アジア系に次いで高率である。このようにマイノリティの大都市圏への集中現象が数値から確認できる。

## 2. 人口規模別にみた大都市圏の人種構成

表5は大都市圏を人口規模別にわけてその人種構成を見たものである。この表からやはり大都市圏の規模が大きくなるほど白人人口比率が少なくなり、マイノリティ人口比率が

表5 大都市圏規模別の人種構成 (1990年・2000年)

人種区分		全国	大都市圏(MSA/CMSA)					非大都市圏		
			合計	250万 以上	100万 ~250 万	50万 ~100 万	25万 ~ 50万		25万 未満	
1990年		%	%	%	%	%	%	%		
すべての人種		100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0		
非 ヒ ス パ ニ ック	白人	75.6	72.9	64.7	79.3	75.8	78.9	83.7	85.1	
	黒人	11.7	12.7	14.8	11.2	13.3	9.9	9.0	8.6	
	アメリカインディアン・エスキモー・アレウト族	0.7	0.5	0.3	0.5	0.7	0.5	0.7	1.7	
	アジア系および太平洋諸島系	2.8	3.4	5.0	2.1	3.4	1.6	1.2	0.8	
	その他の人種	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.0	
ヒスパニック		9.0	10.5	15.0	6.8	6.8	9.0	5.3	3.8	
2000年		%	%	%	%	%	%	%		
すべての人種		100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0		
非 ヒ ス パ ニ ック	単一人種	白人	69.1	66.0	59.0	73.1	67.7	75.9	78.6	82.0
		黒人もしくはアフリカ系アメリカ人	12.1	12.9	14.0	13.4	11.5	11.2	9.2	8.5
		アメリカインディアンおよび先住アラスカ人	0.7	0.5	0.3	0.5	0.8	0.5	1.0	1.8
		アジア系	3.6	4.3	6.1	2.4	3.6	1.6	1.4	0.7
		先住ハワイ人およびその他の太平洋諸島系	0.1	0.1	0.1	0.1	0.4	0.1	0.0	0.1
		その他の人種	0.2	0.2	0.2	0.2	0.1	0.1	0.1	0.1
	2つ以上の複合人種	1.6	1.7	1.9	1.6	2.0	1.4	1.3	1.2	
ヒスパニックもしくはラティーノ		12.5	14.2	18.2	8.9	13.9	9.2	8.4	5.6	

資料：各年センサスより集計。

高くなって人種構成が多様化してくることがわかる。人口250万以上の大規模な大都市圏ではマイノリティ人口比率は特に高く、1990年（14の大都市圏が含まれる）でも35.3%に達していたが、2000年（19の大都市圏が含まれる）になるとその数値は41.0%にまで上昇した。先住アメリカ人を除けばいずれのマイノリティも大都市圏の規模が大きくなるほど人口比率が高くなっているのがわかる。特にラティーノとアジア系でその傾向が著しい。人口規模としては拮抗するアフリカ系とラティーノを比較すれば、250万以上の大都市圏では1990年ではほぼ同程度の人口比率だったが、2000年になるとラティーノの比率がアフリカ系よりはるかに高くなった。ところが50万未満の大都市圏をみると、アフリカ系人口比率がラティーノを凌駕している。ラティーノはアフリカ系に比較して特に大規模大都市圏に集中しているのである。

### 3. 人種別に集中する大都市圏はどこか

同規模の大都市圏でも人種構成は個々に異なるはずである。そこで人種ごとにどの大都市圏で構成比が高いかをランキングにした表6によって人種ごとに特徴を見ておこう。

まず白人の構成比が高い大都市圏の分布を見る。上位20位の大都市圏は白人の構成比率が極めて高く、All-White Town とでも呼べるものである。これらは人口規模の小さな大都市圏が多く、最も大きなスクラントン＝ウィルクスバール大都市圏でも人口62万人で、その他はかなり下位に属する中小の大都市圏が多い。これらの大都市圏の分布はだいたい3つの地域に分かれている。第1のグループはアパラチア山脈北西の山間部である。白人人口率が97.3%と最高のアルトゥーナをはじめ、スクラントン＝ウィルクスバール、ジョンズタウンなどのペンシルベニア州の都市から、オハイオ川沿いのストゥーベンビル＝ワイアトン、パーカーズバーグ、ハンティントン、ホイーリング、そしてテネシー州東端のジョンソンシティがこれに属する。第2のグループは五大湖の西方、ウィスコンシン、ミネソタ、アイオワに広がる地域で、ダルス、セントクラウド、オークレア、ラクロス、ダビュークが含まれ、ノースダコタ州のビスマークもこれに含まれよう。第3はニューイングランド地方で、メイン州のルイストンにポートランドとバンゴー、バーモント州のバーリントン、さらにはマサチューセッツ州西部のピッツフィールドがこれで、ニューヨーク州グレンフォールズもこのグループに含まれるだろう。どのグループであってもこれらの都市の多くは現実には大都市圏というイメージからかけはなれた小都市である。1世紀前には都市規模の大小を問わず、ほとんどがヨーロッパ系白人から構成されていた北部の都市が、工業化し都市を成長させて大都市へと変貌してきた過程で、1910年代半ばから工業労働力としてアフリカ系人口を南部から吸収してきた。しかし工業機能をあまり持たず

表6 人種ごとにみた人種別人口構成比率の高い大都市圏 (2000年)

白人 White			アフリカ系 Black or African American				
順位	人口 順位	大都市圏	人口 比率	順位	人口 順位	大都市圏	人口 比率
1	222	アルトウーナ (PA)	97.3	1	234	オールバニ (GA)	50.8
2	199	パーカーズバーグ (WV-OH)	96.9	2	268	パインブラフ (AR)	49.4
3	265	ダビューク (IA)	96.5	3	251	サムター (SC)	46.5
4	264	ルイストン (ME)	96.2	4	95	ジャクソン (MS)	45.4
5	67	スクラントン=ウィルクスパール (PA)	96.2	5	43	メンフィス (TN-AR-MS)	43.2
6	152	ジョンズタウン (PA)	95.9	6	208	ロッキーマウント (NC)	42.9
7	126	ハンティントン=アッシュランド (WV-KY-OH)	95.7	7	136	コロンバス (GA)	40.0
8	84	ジョンソンシティ=キングズポート (TN-VA)	95.6	8	229	フローレンス (SC)	39.1
9	203	オークレア (WI)	95.6	9	121	モントゴメリー (AL)	38.8
10	230	グレンフォールズ (NY)	95.4	10	124	メーコン (GA)	37.3
11	147	ポートランド (ME)	95.3	11	34	ニューオーリンズ (LA)	37.3
12	184	セントクラウド (MN)	95.3	12	104	シュリーブポート (LA)	37.2
13	196	ホイーリング (WV-OH)	95.3	13	133	サバナ (GA)	34.7
14	263	バンゴー (ME)	95.2	14	129	フェイエットビル (NC)	34.4
15	260	ビスマーク (ND)	94.9	15	86	オーガスタ (GA-SC)	34.1
16	183	バーリントン (VT)	94.5	16	218	グリーンビル (NC)	33.5
17	146	ダルース (MN-WI)	94.5	17	206	モンロー (LA)	33.5
18	224	ラクロス (WI-MN)	94.3	18	134	タラハシー (FL)	33.3
19	219	ストウーベンビル=ワイアトン (OH-WV)	94.1	19	243	ゴールズボロ (NC)	32.9
20	267	ピッツフィールド (MA)	93.9	20	249	ダンビル (VA)	32.5
アジア系 Asian			ラティーノ Hispanic or Latino				
順位	人口 順位	大都市圏	人口 比率	順位	人口 順位	大都市圏	人口 比率
1	55	ホノルル (HI)	45.3	1	168	ラレド (TX)	94.3
2	5	サンフランシスコ (CA)	18.3	2	74	マッカレン (TX)	88.3
3	75	ストックトン (CA)	11.0	3	120	ブラウンズビル (TX)	84.3
4	2	ロサンゼルス (CA)	10.3	4	63	エルパソ (TX)	78.2
5	214	ユバシティ (CA)	9.5	5	178	ラスクルーセス (NM)	63.4
6	24	サクラメント (CA)	8.9	6	108	コーパスクリスティ (TX)	54.7
7	17	サンディエゴ (CA)	8.7	7	29	サンアントニオ (TX)	51.2
8	13	シアトル (WA)	7.8	8	112	バイセリア (CA)	50.8
9	53	フレズノ (CA)	7.0	9	190	ユマ (AZ)	50.5
10	1	ニューヨーク (NY-NJ-CT-PA)	6.7	10	102	サリナス (CA)	46.8
11	160	マーセド (CA)	6.7	11	160	マーセド (CA)	45.3
12	175	シャンパーン=アーバナ (IL)	6.4	12	205	サンタフェ (NM)	44.4
13	102	サリナス (CA)	5.8	13	53	フレズノ (CA)	44.0
14	138	アンカレッジ (AK)	5.5	14	61	アルバカーキ (NM)	41.6
15	4	ワシントン=ボルティモア (DC-MD-VA-WV)	5.2	15	12	マイアミ (FL)	40.3
16	10	ヒューストン (TX)	4.8	16	2	ロサンゼルス (CA)	40.3
17	31	ラスベガス (NV-AZ)	4.6	17	269	ビクトリア (TX)	39.2
18	228	ウォーソー (WI)	4.5	18	64	ベイカーズフィールド (CA)	38.4
19	273	コーバリス (OR)	4.5	19	211	プエブロ (CO)	38.0
20	231	ロチェスター (MN)	4.2	20	155	ヤキマ (WA)	35.9

人種・民族構成からみたアメリカ大都市圏の動向（樋口忠成）

先住アメリカ人 American Indian and Alaska Native			複合人種 Population of Two or More Races				
順位	人口順位	大都市圏	人口比率	順位	人口順位	大都市圏	人口比率
1	233	フラッグスタッフ (AZ-UT)	26.7	1	55	ホノルル (HI)	16.9
2	266	ラピッドシティ (SD)	7.6	2	138	アンカレッジ (AK)	5.1
3	138	アンカレッジ (AK)	7.0	3	58	タルサ (OK)	4.4
4	58	タルサ (OK)	6.8	4	241	ロートン (OK)	3.7
5	61	アルバカーキ (NM)	5.0	5	24	サクラメント	3.7
6	162	フォートスミス (AR-OK)	5.0	6	214	ユバシティ (CA)	3.6
7	241	ロートン (OK)	4.8	7	13	シアトル (WA)	3.6
8	272	グレートフォールズ (MT)	4.0	8	75	ストックトン (CA)	3.5
9	155	ヤキマ (WA)	4.0	9	162	フォートスミス (AR-OK)	3.4
10	48	オクラホマシティ (OK)	4.0	10	48	オクラホマシティ (OK)	3.3

資料：2000年センサスによる。

大都市に成長しなかったこれらの都市は人種の多様化を経験しなかったのだろうと考えられる。

続いてアフリカ系アメリカ人の比率が高い大都市圏の分布を見ておこう。大都市圏のレベルでアフリカ系の構成比が50%を超えているのはジョージア州南部のオールバニだけである。またリスト上の20の大都市圏の中には人口100万を超える大都市圏としてニューオリンズとメンフィスの2つがランクインしている。白人人口率が高い大都市圏のリストと比べるとアフリカ系比率の高い大都市圏の規模の方が大きいといえるだろう。それでもベスト3にランクされている大都市圏のように10万人前後の小規模なものも多い。これらの大都市圏の分布は東のノースカロライナ州のロッキーマウント、ゴールズボロ、フェイエットビルから西のルイジアナ州のモンロー、シュリーブポートまで帯状に分布している。いわゆるコットンベルトと重なるディープサウス全体に広がっているのである。

次にアジア系比率の高い大都市圏を見よう。まずハワイ州のホノルルで圧倒的に比率が高いのが目につく。単一人種としてのアジア系だけで人口の45.3%を占めている。次いで、サンフランシスコをはじめカリフォルニアの大都市圏が並んでいる。ベスト10でカリフォルニア州以外はホノルルとシアトルとニューヨークだけである。アジア系の比率が高い大都市圏の分布の特徴は特に大規模な大都市圏でその比率が高いことで、人口規模5位までの大都市圏はシカゴを除けばこのアジア系ベスト20位のリストに登場している。ただ下位になるとアジア系比率は5%を切るので、イリノイ大学のあるシャンパーン＝アーバナやオレゴン州立大学のあるコーバリスのような大学町、あるいは東南アジアのモン族が集中するウィスコンシン州ウォーソーのような特例的なところもリストに名を連ねる。

それではラティーノの分布はどうだろうか。ラティーノ人口比率がもっとも高い大都市圏はテキサス州ラレドで、94.3%という高率である。ラレドのラティーノの約80%はメキ

シコ系なので、ここはAll-Mexican Townと呼んでいいだろう。2位から4位までのマッカレン、ブラウンズビル、エルパソの大都市圏もラレドと同様テキサス州とメキシコの国境を流れるリオグランデに沿った国境の都市で、ラティーノ（そのほとんどがやはりメキシコ系）が人口のほぼ8割以上を持つAll-Mexican Townである。

これらの他にもラティーノ人口が50%を超えて絶対的マジョリティになっている大都市圏があと5つある。その中には160万の人口規模を持つサンアントニオも含まれている（したがってサンアントニオのラティーノ人口は80万を超える）。さらにはその10倍の1600万の人口を持つアメリカ第2の大都市圏であるロサンゼルスが、40%を超えるラティーノ人口を抱えていることは特筆に価する。ロサンゼルス大都市圏はラティーノの人口だけで660万あり、この人口規模はフィラデルフィアやボストンやデトロイトの大都市圏人口をも上回る数値なのである。その660万のラティーノのうち500万がメキシコ系で75%を占め圧倒的に多い。ロサンゼルスは巨大都市なのでもちろん他のラテンアメリカ系の人口も絶対数としては多いが、比率としてある程度高いラティーノはエルサルバドル系およびゲアテマラ系などの中央アメリカ出身者である。

ロサンゼルスとほとんど同じ40%のラティーノ比率を持つのがフロリダ州マイアミである。マイアミ大都市圏は人口388万、このうち156万がラティーノである。このうち45%の70万をキューバ系が占める。ロサンゼルスがメキシコシティに次ぐメキシコ第2の都市という表現ができるとすれば、マイアミはハバナに次ぐキューバ第2の都市といえるであろう。マイアミはロサンゼルスにましてラティーノ人口がはるかに多様で、人口の半数を占めるキューバ系以外にもプエルトリコ系、コロンビア系、ニカラグア系などカリブ海諸国をルーツに持つ人口や、中央アメリカ、南アメリカ各地にルーツを持つラティーノが集まっている。マイアミからカリブ海の諸国への距離はニューヨークよりはるかに近く、また航空路によってラテンアメリカ各国の首都とつながるノードとしての役割を果たし、別名「ラテンアメリカの首都」といわれることに関連していると思われる。これらの都市のほかでは、テキサス州からカリフォルニア州に至るアメリカ南西部の大都市圏で多くのラティーノ人口を抱えている。

次に先住アメリカ人の比率の高い都市をみてみよう。これまで見てきた人種集団に比べて先住アメリカ人がマジョリティをなす大都市圏は存在しない。ただ大都市圏の中ではアリゾナ州フラッグスタッフが26.7%の先住アメリカ人比率を持ち、他の大都市圏と比較して高い数値を持っている。フラッグスタッフMSAは域内にグランドキャニオン国立公園が広がる広域のMSAで、フラッグスタッフの町はそのグランドキャニオン国立公園のゲートウェイに位置している。域内には国立公園だけでなくナバホ族やホピ族の居留地もあ

って、このため先住民人口が特に多いと考えられる。フラッグスタッフMSA自体が人口12.2万なので大都市圏と言えるほどの規模ではないが、中心となっているフラッグスタッフの都市化地区は人口がたったの5.7万にすぎない。MSA内の先住民は実はその80%以上が都市化地区外の住民で、都市化地区内に限ると先住民比率は10%程度にしかすぎない。したがってフラッグスタッフの先住民比率が非常に高いのは、大都市圏の構成単位にカウンティという（西部では特に）広域の地域を採用していることの結果としてなのである。それでも10%という数字でも他の大都市圏に比較すれば高いが、先住アメリカ人は特に大都市圏に集住する形態はとっていない。フラッグスタッフ以外に先住民比率の高いオクラホマ州タルサやニューメキシコ州アルバカーキのような中規模の大都市圏も、MSA内の周辺部に先住民の居留地があってその結果人口比率が高くなっているという事情は同様である。

最後に複合人種の分布をみておこう。2000年センサスで新たらしく設けられたこのカテゴリーによって、人種分類を単一人種だけでなく複数の人種をあわせもつ複合人種の分類が可能になった。6種の単一人種（白人、黒人、先住アメリカ人、アジア系、ハワイ系、その他）をもとに組み合わせが想定できる。組み合わせの種類は、2種が15、3種が20、4種が15、5種が6、そして6種が1あるので、57の複合人種のタイプが可能である。しかし現実には、非ラティーノの複合人種の92.5%が2種類の人種の組み合わせとなっており、4種以上になると1%にも満たない。2種の組み合わせで実数として最も多いのは、白人と先住アメリカ人の組み合わせであり、次いで白人とアジア系、白人と「その他の人種」の順となっている。単一人種としては最多の白人と2番目の黒人の組み合わせはその次の4位にすぎない。単一人種による各人種の人口とその人種を含む複合人種の人口の比率をみると、「その他の人種」を別にすれば、ハワイ先住民の複合人種比率が最も高く、現実の数字としてハワイ先住民を含む複合人種の数の方が単一人種としてのハワイ先住民の数を上回っているのである。

つまりハワイ先住民は人種集団の中で最も混血が進んでいるといえるのである。これに次いで先住アメリカ人の複合人種比率が高く、これら先住民系は他の集団に比べて人種間結婚が多いのであろう。なお比率ではアジア系がこれら先住民系に続いている。

大都市圏で複合人種の人口比率が最高を示すのはハワイ州ホノルルである。その比率は16.9%に達し、これはアジア系45.3%、白人20.0%に次いで高く、ハワイ先住民8.5%の2倍という値になっている。

表7 アメリカ合衆国の上位50大都市圏の人種構成比率 (1990年)

人口 順位	大都市圏 (MSA/CMSA)	人口	非ヒスパニック					ヒスパ ニック
			白人	黒人	インディア ン、エスキ モー、アレ ウト族	アジア系 および 太平洋諸 島系	その他 の人種	
		人	%	%	%	%	%	%
	全国	248,709,873	75.6	11.7	0.7	2.8	0.1	9.0
	大都市圏(MSA/CMSA)の 合計	192,725,741	72.9	12.7	0.5	3.4	0.1	10.5
	上位50の大都市圏の合計	134,965,242	70.1	14.0	0.4	3.9	0.1	11.6
1	ニューヨーク	18,087,251	63.2	16.4	0.2	4.6	0.2	15.4
2	ロサンゼルス	14,531,529	49.8	8.0	0.4	<b>8.8</b>	0.2	<b>32.9</b>
3	シカゴ	8,065,633	66.7	18.9	0.2	3.1	0.1	11.1
4	サンフランシスコ	6,253,311	61.2	8.3	0.5	<b>14.3</b>	0.2	15.5
5	フィラデルフィア	5,899,345	75.6	18.3	0.2	2.0	0.1	3.8
6	デトロイト	4,665,236	75.4	20.8	0.4	1.5	0.1	1.9
7	ボストン	4,171,643	86.8	5.2	0.2	2.9	0.3	4.6
8	ワシントン	3,923,574	62.7	26.2	0.3	5.0	0.1	5.7
9	ダラス=フォートワース	3,885,415	69.7	14.0	0.4	2.4	0.1	13.4
10	ヒューストン	3,711,043	57.9	17.5	0.2	3.4	0.1	<b>20.8</b>
11	マイアミ	3,192,582	47.8	17.4	0.1	1.3	0.1	<b>33.3</b>
12	アトランタ	2,833,511	70.1	25.8	0.2	1.8	0.0	2.0
13	クリーブランド	2,759,823	80.9	15.9	0.2	1.0	0.1	1.9
14	シアトル	2,559,164	84.9	4.7	<b>1.2</b>	<b>6.2</b>	0.1	3.0
15	サンディエゴ	2,498,016	65.4	6.0	0.6	<b>7.4</b>	0.2	<b>20.4</b>
16	ミネアポリス=セントポール	2,464,124	<b>91.3</b>	3.6	0.9	2.6	0.1	1.5
17	セントルイス	2,444,099	80.5	17.2	0.2	0.9	0.1	1.1
18	ボルティモア	2,382,172	71.0	25.7	0.3	1.8	0.0	1.3
19	ピッツバーグ	2,242,798	<b>90.6</b>	7.9	0.1	0.7	0.1	0.6
20	フェニックス	2,122,101	77.1	3.3	<b>1.5</b>	1.6	0.1	16.3
21	タンパ=セントピーターズバーグ	2,067,959	83.1	8.8	0.2	1.1	0.0	6.7
22	デンバー	1,848,319	79.7	5.1	0.6	2.2	0.1	12.2
23	シンシナティ	1,744,124	86.8	11.6	0.1	0.8	0.1	0.5
24	ミルウォーキー	1,607,183	81.3	13.2	0.5	1.2	0.1	3.8
25	カンザスシティ	1,566,280	82.8	12.7	0.5	1.1	0.1	2.9
26	サクラメント	1,481,102	73.2	6.7	0.9	<b>7.4</b>	0.2	11.6
27	ポートランド	1,477,895	89.5	2.8	0.8	3.4	0.1	3.4
28	ノーフォーク	1,396,107	66.7	<b>28.2</b>	0.3	2.4	0.1	2.3
29	コロンバス	1,377,419	85.5	11.9	0.2	1.5	0.1	0.8
30	サンアントニオ	1,302,099	44.3	6.5	0.2	1.1	0.2	<b>47.6</b>
31	インディアナポリス	1,249,822	84.4	13.7	0.2	0.8	0.1	0.9
32	ニューオーリンズ	1,238,816	59.3	34.4	0.3	1.6	0.1	4.3
33	バッファロー	1,189,288	86.3	10.1	0.6	0.9	0.1	2.0
34	シャーロット	1,162,093	77.9	19.9	0.3	0.9	0.0	0.9
35	プロビデンス	1,141,510	90.5	2.9	0.3	1.7	0.5	4.2
36	ハートフォード	1,085,837	83.1	8.2	0.1	1.4	0.1	7.0
37	オーランド	1,072,748	76.8	12.1	0.3	1.8	0.1	9.0
38	ソルトレークシティ	1,072,227	<b>90.2</b>	0.9	0.7	2.3	0.1	5.8
39	ロチェスター	1,002,410	86.1	9.1	0.3	1.4	0.1	3.1
40	ナッシュビル	985,026	82.6	15.4	0.2	1.0	0.0	0.8
41	メンフィス	981,747	57.7	<b>40.5</b>	0.2	0.8	0.0	0.8
42	オクラホマシティ	958,839	79.6	10.4	<b>4.6</b>	1.8	0.1	3.6
43	ルイビル	952,662	85.6	13.0	0.2	0.6	0.1	0.6
44	デイトン	951,270	84.8	13.2	0.2	1.0	0.1	0.8
45	グリーンズボロ	942,091	79.0	19.3	0.3	0.7	0.0	0.8
46	バーミングハム	907,810	71.9	<b>27.0</b>	0.2	0.4	0.0	0.4
47	ジャクソンビル	906,727	75.8	19.8	0.3	1.6	0.0	2.5
48	オールバニ	874,304	<b>92.2</b>	4.5	0.2	1.2	0.1	1.8
49	リッチモンド	865,640	68.2	<b>29.0</b>	0.3	1.3	0.0	1.1
50	ウェストパームビーチ	863,518	79.1	12.0	0.1	1.0	0.1	7.7

太字は各人種の構成比率が上位5位(ただし構成比率1%以上)のものを示す。  
資料:1990年センサスによる。



人種・民族構成からみたアメリカ大都市圏の動向（樋口忠成）

表8 アメリカ合衆国の上位50大都市圏の人種構成比率（2000年）

人口 順位	大都市圏 (MSA/CMSA)	人口	非ヒスパニックもしくは非ラティーノ							複合 人種	ヒスパ ニックも しくはラ ティーノ
			単一人種								
			白人	黒人もし くはアフ リカ系ア メリカ人	先住アメリ カ人および アラスカ先 住民	アジア 系	ハワイ先住 民およびそ の他の太平 洋諸島系	その他 人種	複合 人種		
		人	%	%	%	%	%	%	%	%	
	全国	281,421,906	69.1	12.1	0.7	3.6	0.1	0.2	1.6	12.5	
	大都市圏(MSA/CMSA)の 合計	225,981,679	66.0	12.9	0.5	4.3	0.1	0.2	1.7	14.2	
	上位50の大都市圏の合計	162,514,411	62.8	13.9	0.4	5.1	0.1	0.2	1.8	15.6	
1	ニューヨーク	21,199,865	56.4	16.1	0.2	6.7	0.0	0.4	2.0	18.2	
2	ロサンゼルス	16,373,645	39.0	7.3	0.3	<b>10.3</b>	0.2	0.2	2.3	<b>40.3</b>	
3	シカゴ	9,157,540	59.4	18.4	0.1	4.2	0.0	0.1	1.4	16.4	
4	ワシントン＝ボルティモア	7,608,070	60.1	25.9	0.2	5.2	0.0	0.2	1.9	6.4	
5	サンフランシスコ	7,039,362	50.6	7.1	0.4	<b>18.3</b>	0.5	0.3	<b>3.3</b>	19.7	
6	フィラデルフィア	6,188,463	70.4	19.2	0.2	3.2	0.0	0.1	1.3	5.6	
7	ボストン	5,819,100	82.5	4.8	0.2	4.0	0.0	0.7	1.7	6.2	
8	デトロイト	5,456,428	71.6	20.9	0.3	2.3	0.0	0.1	1.8	2.9	
9	ダラス＝フォートワース	5,221,801	59.3	13.6	0.4	3.7	0.1	0.1	1.3	21.5	
10	ヒューストン	4,669,571	48.0	16.7	0.2	4.8	0.0	0.1	1.2	<b>28.9</b>	
11	アトランタ	4,112,198	59.8	<b>28.7</b>	0.2	3.3	0.0	0.2	1.3	6.5	
12	マイアミ	3,876,380	36.3	19.4	0.1	1.7	0.0	0.3	1.8	<b>40.3</b>	
13	シアトル	3,554,760	77.0	4.6	<b>1.1</b>	7.8	0.5	0.2	<b>3.6</b>	5.2	
14	フェニックス	3,251,876	65.8	3.5	<b>1.8</b>	2.0	0.1	0.1	1.5	25.1	
15	ミネアポリス＝セントポール	2,968,806	<b>84.7</b>	5.2	0.7	4.1	0.0	0.1	1.8	3.3	
16	クリーブランド	2,945,831	77.8	16.6	0.2	1.3	0.0	0.1	1.3	2.7	
17	サンディエゴ	2,813,833	55.0	5.5	0.5	8.7	0.4	0.2	<b>2.9</b>	<b>26.7</b>	
18	セントルイス	2,603,607	77.4	18.2	0.2	1.4	0.0	0.1	1.1	1.5	
19	デンバー	2,581,506	71.8	4.5	0.5	2.8	0.1	0.1	1.7	18.5	
20	タンパ＝セントピーターズバーグ	2,395,997	76.0	9.9	0.3	1.9	0.0	0.2	1.3	10.4	
21	ピッツバーグ	2,358,695	<b>89.1</b>	8.0	0.1	1.1	0.0	0.1	0.8	0.7	
22	ポートランド	2,265,223	81.0	2.3	0.8	4.1	0.3	0.1	2.6	8.7	
23	シンシナティ	1,979,202	<b>84.7</b>	11.6	0.2	1.2	0.0	0.1	1.0	1.1	
24	サクラメント	1,796,857	63.7	6.9	0.7	<b>8.9</b>	0.4	0.2	<b>3.7</b>	15.5	
25	カンザスシティ	1,776,062	78.3	12.6	0.4	1.6	0.1	0.1	1.6	5.2	
26	ミルウォーキー	1,689,572	75.0	14.9	0.4	1.9	0.0	0.1	1.2	6.5	
27	オーランド	1,644,561	65.1	13.3	0.3	2.7	0.1	0.3	1.8	16.5	
28	インディアナポリス	1,607,486	80.8	13.8	0.2	1.2	0.0	0.1	1.1	2.7	
29	サンアントニオ	1,592,383	39.4	6.4	0.3	1.4	0.1	0.1	1.2	<b>51.2</b>	
30	ノーフォーク	1,569,541	61.1	<b>30.6</b>	0.4	2.7	0.1	0.2	1.9	3.1	
31	ラスベガス	1,563,282	63.1	7.8	0.7	4.6	0.4	0.1	2.5	20.6	
32	コロンバス	1,540,157	80.4	13.3	0.2	2.4	0.0	0.2	1.7	1.8	
33	シャーロット	1,499,293	71.2	20.4	0.4	1.9	0.0	0.1	0.9	5.1	
34	ニューオーリンズ	1,337,726	54.7	<b>37.3</b>	0.3	2.1	0.0	0.2	1.0	4.4	
35	ソルトレークシティ	1,333,914	82.8	1.0	0.7	2.1	0.9	0.1	1.6	10.8	
36	グリーンズボロ	1,251,509	72.3	20.0	0.3	1.3	0.0	0.1	0.9	5.0	
37	オースティン	1,249,763	60.7	7.7	0.3	3.5	0.1	0.1	1.4	26.2	
38	ナッシュビル	1,231,311	78.0	15.5	0.3	1.6	0.0	0.1	1.2	3.3	
39	プロビデンス	1,188,613	<b>83.4</b>	3.5	0.3	2.2	0.0	0.7	1.9	7.9	
40	ローリー	1,187,941	66.8	22.5	0.3	2.9	0.0	0.1	1.2	6.1	
41	ハートフォード	1,183,110	77.4	9.0	0.2	2.2	0.0	0.2	1.5	9.6	
42	バッファロー	1,170,111	82.5	11.5	0.6	1.3	0.0	0.1	1.1	2.9	
43	メンフィス	1,135,614	51.8	<b>43.2</b>	0.2	1.4	0.0	0.1	0.8	2.4	
44	ウェストバームビーチ	1,131,184	70.6	13.5	0.1	1.5	0.0	0.2	1.6	12.4	
45	ジャクソンビル	1,100,491	70.4	21.4	0.3	2.3	0.1	0.2	1.5	3.8	
46	ロチェスター	1,098,201	82.2	9.9	0.3	1.8	0.0	0.1	1.3	4.3	
47	グランドラピッズ	1,088,514	<b>83.0</b>	7.1	0.5	1.5	0.0	0.1	1.4	6.3	
48	オクラホマシティ	1,083,346	72.9	10.4	<b>4.0</b>	2.5	0.1	0.1	<b>3.3</b>	6.7	
49	ルイビル	1,025,598	82.0	13.8	0.2	1.1	0.0	0.1	1.2	1.6	
50	リッチモンド	996,512	64.0	<b>29.9</b>	0.4	2.0	0.0	0.1	1.1	2.3	

太字は各人種の構成比率が上位5位（ただし構成比率1%以上）のものを示す。

資料：2000年センサスによる。

#### 4. おもな大都市圏の人種構成の特徴

この節ではおもな大都市圏をとりあげて人種構成をみておきたい。2000年センサスの結果、人口100万をもつ大都市圏はほぼ50（正確には49）であった。そこでここでは上位50の大都市圏をとりあげて考察することにする。1990年と2000年における上位50の大都市圏の人種構成を示したものが表7と表8である。

まず上位50の大都市圏をあわせた人種構成比と全国およびすべての大都市圏合計との人種構成比を比較しよう。すでに大都市圏の規模別の人種構成で考察したのと同じく、全国もしくは大都市圏合計に比較すれば、上位の大都市圏は非ラティーノの白人人口比率が低く、先住アメリカ人を除けばマイノリティ人口の比率が高いという特徴をもつ。特に最上位に位置する大都市圏ではニューヨークに代表されるように人種構成の多様化というこの特徴はもっとはっきりしている。

大都市圏の人口規模によって人種構成が多様化するという事実と同時に、一方で個々の大都市圏はそれぞれ独自の特徴を持っているのもまた真実である。何よりも注目できるのは、ロサンゼルスとマイアミであろう。この2つの大都市圏では1990年からすでに非ラティーノ白人人口の比率がすでに50%を切っていた。しかし他のどの人種集団よりも人口規模は多く、相対的なマジョリティは維持していた。しかし2000年には白人とラティーノの人口規模は逆転したのである。ラティーノ人口比率は2つの大都市圏とも40.3%となり、一方白人人口比率はロサンゼルスで39.0%、マイアミでは36.3%と30%台にまで低下して相対的なマジョリティの座からも滑り落ちた。これと同じ現象は1990年にすでにサンアントニオでおきており、サンアントニオは2000年になるとラティーノ人口が50%を超えて絶対的なマジョリティになった。「ラテン化するアメリカ都市」の典型例であろう。

しかしラティーノ人口の比率は大都市圏によってその差が非常に大きい。サンアントニオやロサンゼルス、マイアミのようにマジョリティ集団になっているところもあれば、ピッツバーグのようにラティーノ人口が1%以下のところもある。ラティーノ人口比率が低い大都市圏を低い順にあげれば、ピッツバーグに次いでシンシナティ、セントルイス、レイビル、コロンバスで、これらはすべて中西部の大都市圏となっている。中西部ではデトロイトやクリーブランドのように規模の大きい大都市圏でもその比率は3%以下である。

ラティーノに比較すればアフリカ系の分布の偏在は幾分穏やかである。アフリカ系比率が高い50の大都市圏を比率の順にあげるとメンフィス、ニューオーリンズ、ノーフォーク、リッチモンド、アトランタとなり、いずれも南部の大都市圏であるが、アフリカ系比率が最高のメンフィスでも43.2%である。またこれらの大都市圏のアフリカ系人口比率は1990年と比べると2000年は増えている。ところが大規模なニューヨーク、ロサンゼルス、シカ

ゴでは一定のアフリカ系人口を抱えているが、1990年代のラティーノ比率急上昇の影で、むしろその比率を低下させているのも90年代の大きな変化であろう。アフリカ系人口の流入によって1世紀近くにわたって継続してきた大都市圏でのアフリカ系比率の上昇傾向がここにきて頭打ちになったのである。また50の大都市圏の中でアフリカ系人口比率が最も低いのはソルトレークシティの1.0%だが、アフリカ系が3%に満たないのはそれとオレゴン州ポートランドだけである。ラティーノ人口比率が3%未満の大都市圏が11あるのと比較すれば、アフリカ系人口の分布は地域や都市規模によって差があるもののラティーノより多くの大都市圏に定着し拡散しているといえるだろう。

アジア系は全国人口の3.6%を占めるにすぎないが、上位50の大都市圏計では5.1%を占めている。その中でもっとも高率なのはサンフランシスコで、人口の18.3%を占める。次いでロサンゼルス、サクラメント、サンディエゴとカリフォルニアの大都市圏が続き、北西部のシアトルと北東部のニューヨーク、ワシントン＝ボルティモアで5%を越えている。カリフォルニア州とそれ以外の大きな大都市圏に比率が高くなっている。

これら以外の人種に関しては、上位50の大都市圏の中には比率が5%を超える大都市圏がない。先住アメリカ人のオクラホマシティ（比率4.0%）が目立つ程度である。

## IV 大都市圏の人種コンビネーションパターンとその分布

### 1. 人種コンビネーションの決定方法

個々のアメリカ大都市圏の人種構成はもちろんそれぞれ異なっている。そこで大都市圏によってそれぞれ異なる人種構成をより簡明に把握する方法として人種のコンビネーションの概念を導入したい。異なる人種構成比率を簡略化することによって構成比の少ない人種カテゴリーが捨象されることになるが、全体の把握のためには優れた方法であると思われる。ウィーバーはアメリカ中西部の農業地域を分析する際に、作物の作付面積の比率からその地域の作物結合型を決定したが、これを各大都市圏の人種構成の比率に適用して各大都市圏のいわば「人種結合型」を決定しようという試みである。分析の対象としたのは2000年の267すべての大都市圏（MSA/CMSA）で、8つの人種カテゴリーに対してこれを適用した。ただしコンビネーションを形成することができる人種をそれぞれの大都市圏の人口構成で3%以上の比率を持つ上位5つの人種カテゴリーに限定した。

### 2. 人種構成コンビネーションパターンの考察

ウィーバー法によって算出された人種コンビネーションパターンを大都市圏の地域と規

模によって整理したのが表9である。理論的にはさまざまなコンビネーションの種類が想定できるが、実際に出現するコンビネーションは限られている。まずコンビネーションに含まれる人種カテゴリーの数からみれば、276の大都市圏のうち、絶対多数の62%にあたる175の大都市圏が単一人種つまり1人種のパターンであり、30%にあたる82の大都市圏が2人種のコンビネーションであった。複雑な3人種コンビネーションが12、4人種が2、5人種のコンビネーションが5つあった。

単一人種のパターンでは、175の大都市圏のうち、圧倒的多数の171が白人のみのパターンで、残りの4つがラティーノのみのパターンだった。アフリカ系やアジア系のみのパターンは存在しなかった。2人種のコンビネーションパターンでは、白人とアフリカ系のパターンが最も多く53を数え、白人とラティーノのコンビネーションが28あった。その他では白人と先住アメリカ人のコンビネーションパターンが1つあっただけで、アジア系などを含むパターンはなく、またコンビネーションに白人が登場しないパターンの大都市圏もなかった。3人種のコンビネーションでは、すべてのパターンに白人とラティーノが含まれ、これにアフリカ系が加わったものが10、アジア系が加わったものが2つであった。7つの大都市圏が該当する4種以上のコンビネーションでも、すべてに白人とラティーノが含まれていたが、これに組み合わせられる人種の種類はさまざまであった。それではこれらのコンビネーションパターンをもつ大都市圏の分布を地域別と規模別に見ておこう。なお表10にそれぞれの人種コンビネーションに分類されるおもな大都市圏の一覧を示した。

表9 人種構成コンビネーションによる大都市圏数 (2000年)

人種コンビネーション	大都市圏数	地域別				人口規模別				
		北東部	中西部	南部	西部	250万以上	100万~250万	50万~100万	25万~50万	25万未満
総数	276	35	70	121	50	19	30	32	63	132
単一人種のみ										
白人	171	33	68	47	23	5	16	17	43	90
ラティーノ	4	0	0	4	0	0	0	2	1	1
2人種のコンビネーション										
白人とアフリカ系	53	1	1	51	0	4	7	7	12	23
白人と先住アメリカ人	1	0	0	0	1	0	0	0	0	1
白人とラティーノ	28	0	0	8	20	4	2	5	5	12
3人種のコンビネーション										
白人とアフリカ系とラティーノ	10	1	1	8	0	5	2	0	1	2
白人とアジア系とラティーノ	2	0	0	0	2	1	0	0	0	1
4人種のコンビネーション	2	0	0	1	1	0	1	0	0	1
5人種のコンビネーション	5	0	0	2	3	0	2	1	1	1

資料：2000年センサスより集計。

人種・民族構成からみたアメリカ大都市圏の動向（樋口忠成）

まず、地域別に考察すると、コンビネーションパターンの分布は地域ごとに大きな違いがあることがわかる。その中で北東部と中西部はよく似た傾向を示している。両地域の大都市圏の大部分は南部や西部に比べてマイノリティ人口比率が少なく、コンビネーションパターンとしては大部分が白人のみのパターンであった。両地域の最大大都市圏であるニューヨークとシカゴで、白人とアフリカ系とラティーノの3種のコンビネーションパターンが出現しているのも共通しているし、また両地域で2番目に大きいフィラデルフィアとデトロイトでは、ともに白人とアフリカ系の2種の組み合わせパターンとなっているので

表10 人種コンビネーションパターンとおもな大都市圏（2000年）

人種コンビネーション	大都市圏数	おもな大都市圏
単一人種のみ		
白人	171	ボストン, シアトル, ミネアポリス=セントポール, クリーブランド, セントルイス, タンパ=セントピーターズバーグ, ピッツバーグ, ポートランド, シンシナティ, カンザスシティ, ミルウォーキー, インディアナポリス, コロンバス, ソルトレークシティ, ナッシュビル, プロビデンス, ハートフォード, バッファロー, ロチェスター, グランドラピッズ, ルイビル, グリーンビル(SC), デイトン(OH), オールバニ(NY) など
ラティーノ	4	エルパソ(TX), マッカレン(TX), ブラウンズビル(TX), ラレド(TX)
2人種のコンビネーション		
白人とアフリカ系	53	ワシントン=ボルティモア, フィラデルフィア, デトロイト, アトランタ, ノーフォーク, シャーロット, ニューオーリンズ, グリーンスボロ, ローリー, メンフィス, ジャクソンビル, リッチモンド, バーミングハム(AL), バトンルージュ(LA), リトルロック(AR) など
白人と先住アメリカ人	1	フラッグスタッフ(AZ)
白人とラティーノ	28	フェニックス, サンディエゴ, デンバー, オースティン, トゥーソン(AZ), アルバカーキ(NM), ベーカーズフィールド(CA), ストックトン(CA), モデスト(CA), サンタバーバラ(CA) など
3人種のコンビネーション		
白人とアフリカ系とラティーノ	10	ニューヨーク, シカゴ, ダラス=フォートワース, ヒューストン, マイアミ, オーランド, ウェストバームビーチ, キリーン(TX), ウェーコ(TX), タイラー(TX)
白人とアジア系とラティーノ	2	サンフランシスコ, ユバシティ(CA)
4人種のコンビネーション		
白人・アフリカ系・アジア系・ラティーノ	2	ラスベガス, ブライアン=カレッジステーション(TX)
5人種のコンビネーション		
	5	サクラメント, オクラホマシティ, ホノルル, アンカレッジ(AK), ロートン(OK)

(注) 下位の大都市圏には州名をつけた

資料：2000年センサスから算出。

ある。そしてそれより小さな大都市圏はすべて白人のみのパターンとなっている。

これに対して、南部では大都市圏の人種コンビネーションとして最も多く出現したのは、白人とアフリカ系のコンビネーションパターンで、51を数えた。これに対し白人のみのパターンは47にとどまった。さらにこれらにラティーノを加えたパターン、つまり白人・アフリカ系・ラティーノというパターンと白人・ラティーノというパターンがそれぞれ8つずつあった。ただし白人・アフリカ系・ラティーノの3種コンビネーションのパターンは、8つの大都市圏のうち3つがマイアミ、オーランドなどのフロリダ州に、残りの5つがダラス＝フォートワースやヒューストンなどのテキサス州に位置していたし、また白人とラティーノの2種類のコンビネーションは、サンアントニオ、オースティンなど8つともすべてテキサス州の大都市圏であった。つまりラティーノが含まれるパターンはディープサウスなどの伝統的南部ではなく、フロリダ、テキサスの南部から見れば周辺部なのである。さらに白人・アフリカ系・ラティーノにアジア系が加わった4種のコンビネーションはテキサス州のブライアン＝カレッジステーション、白人・アフリカ系・ラティーノに先住アメリカ人と複合人種が加わった5種コンビネーションは、オクラホマシティとロートンといういずれもオクラホマ州の大都市圏であった。このように、南部では白人とアフリカ系のコンビネーションパターンおよび白人のみのパターンを示す核心部の伝統的な南部（ディープサウス）と、これにラティーノなどが加わって人種構成の多様化を示すと周辺部の新興南部との対比が鮮やかにみられる。

西部の大都市圏の大きな特徴は、南部と同様、多様な人種構成がみられコンビネーションの種類が多いことである。しかし南部とは異なり、組み合わせの中でアフリカ系が出現することが少なくなり、少なくとも3種までのコンビネーションでは出現しない。西部に属する50の大都市圏のうち23が白人のみのパターンで、20が白人とラティーノのパターンである。2種では、前述のアリゾナ州フラッグスタッフが白人と先住アメリカ人という全国で唯一のコンビネーションパターンをも持っている。3種のコンビネーションでも他地域では見られない白人・アジア系・ラティーノの組み合わせが、サンフランシスコとユバシティ（いずれもカリフォルニア州）で出現している。ラスベガスではこのコンビネーションにさらにアフリカ系を加えた4種のパターンとなっている。西部では5種のコンビネーションを持つ大都市圏も3つあり、これに該当するのはサクラメント、ホノルル、アンカレッジだが、組み合わせの要素はすべて異なっている。ホノルルでは大都市圏として唯一ハワイ系の組み合わせが出現している。

このように地域別にみれば西部および南部で複数の人種コンビネーションがみられ、人種構成が多様化し、複雑化している様子がうかがえる。

表9には規模別に見た人種構成コンビネーションパターンをかかげたので、検討しておきたい。大規模な大都市圏ほど人種構成が複雑化していることはすでに述べたが、人種構成コンビネーションのパターンでも同様である。人口250万以上をもつ19の大都市圏をみると、白人のみの単一人種パターンは、ボストン、シアトル、ミネアポリス＝セントポール、クリーブランド、セントルイスの5つにすぎず、2人種のコンビネーションが8、3人種のコンビネーションでさえ6つある。これに対して人口50万から250万では約半数が単一人種のパターンになり、50万未満の大都市圏となると70%が単一人種のパターンとなるのである。人口規模が大きくなるほど複雑な人種構成パターンもつ大都市圏が多いことが確認できる。

以上のように現代のアメリカの大都市圏は人種構成の上でますます多様化が進み、ある意味では都市における人種関係の点で大きな転換点を通過しつつある。しかも大都市圏内に多くの人種や文化的背景を持つ民族が同居する傾向は、現在の人口動向からみてもますます加速すると考えられる。ここで見てきたように大都市圏における人種の多様化、複雑化の展開は地域的にも大都市圏規模によっても大きな格差が存在する。しかしこうした多様化の傾向は、大きな大都市圏からより小さな大都市圏へ、またアメリカの南から北に向かって拡散していくことも確実であろう。

本稿ではアメリカ全体の現状と地域的な展開の動向を概観したにすぎないが、大都市圏における人種や民族の空間的な展開は、こうした全国的な展望を踏まえた上で、個々の大都市圏の分析を通じて明らかにされて行くであろう。セグリゲーションや住み分け、ミドルクラス以上のヨーロッパ系白人マジョリティを中心に居住地として形成されてきた郊外の変化、人種や民族に関連した都市の貧困や経済的衰退、ますます進展する郊外化の展開と人種や民族の関連、ダウントウンの再生やジェントリフィケーションとインナーシティの人種民族居住区との関連、スマートグロスやコンパクトシティの形成にかかわるコミュニティや近隣の活性化と人種や民族のかかわりなど、さまざまな研究課題が大都市圏にはある。これらの考察はより詳細な空間的単位の分析を必要とする。個々の都市に関する研究の蓄積が必要であろう。

本研究を実施するに際しては、平成14～15年度科学研究費補助金基盤研究費（B）（1）（課題14402039）「アメリカ大都市圏の多核化とリージョナル・シティの空間構造に関する地理学的研究」（研究代表者 藤井 正）を使用した。

[参考文献・資料]

- 樋口忠成 (1999) 「アメリカ合衆国の大都市圏の人種構成の多様化」(成田孝三編『大都市圏研究 (上) —多様なアプローチ—』 331-355
- 樋口忠成 (1999) 「アメリカ合衆国の人種別人口分布の地理的考察」『大阪産業大学論集 人文科学編』 97, 15-34
- Davis, George A. and O. Fred Donaldson. 1975. *Blacks in the United States: A Geographic Perspective*. Houghton Mifflin
- Roseman, Curtis C., Hans Dieter Laux, and Günter Thieme eds. 1996. *EthniCity: Geographic Perspective on Ethnic Change in Modern Cities*. Rowman & Littlefield
- U.S. Census Bureau, U.S. Department of Commerce. 1999. *Statistical Abstract of the United States: 1999*
- U.S. Census Bureau, U.S. Department of Commerce. 2003. *Statistical Abstract of the United States: 2003*
- U.S. National Center for Health Statistics, Department of Health and Human Services. 2003. *National Vital Statistics Repots*, 52-10
- U.S. Office of Immigration Statistics, U.S. Department of Homeland Security. 2003. *2002 Yearbook of Immigration Statistics*
- Weaver, J. C. 1954. "Crop-combination Regions in the Middle West." *Geographical Review*. 44: 175-200